クリスマスと新年を迎えるにあたり

主イエスは言われました。

「すべて多く与えられた者は、多く求められ、
多く任された者は、更に多く要求される。」
（ルカ 12:48、2017年10月25日の福音朗読より）

このみことばが、わたくしの心に、強く迫ってきます。

わたくしは、多く与えられた者でしょうか。だれでも、神は、それぞれの人に、使命を授ける。その使命を遂行するために、必要な恵みを与えてくださいます。

わたくしは、自分の役割を、どのように果たしてきただろうかと、考えざるを得ません。

東京大司教の辞任願いは受理されましたが、わたくしの新しい人生はこれからです。これからは、自分が、特に求められていることに、力を注ぎたいと考えております。

「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰による」
（ローマ 3:28）

とパウロは述べています。

「わたしたちは律法の下ではなく、恵みの下にいるのです。」
（ローマ 6:15）

この言葉をゆっくり黙想したいと思います。

そこでわたくしの心に浮かんでくるのは、今年は、「ルターの宗教改革500年である」ということです。

11月23日に、長崎の浦上教会、司教座聖堂で記念行事がありました。

ルターという人は、アウグスチヌス会の修道司祭、非常に熱心で真面目な修道者でした。よく祈り、苦行し、聖書を学び、聖書を教えていたと言われています。どんなに修行しても、どんなに努めても、彼は、自分が神の前に罪びとであるという思いをぬぐい去ることができなかった。「神からの赦しをいただいている」という安心を得ることができなかったそうです。

彼は、詩編を講義にするという役割をいただいた。そして、あるときに、詩編の次の言葉に強く心を打たれた。

「神よ　あなたの義によって　わたしを解放してください」
（詩編 31:2）

これは、ヴルガータ訳(ラテン語)の直訳ですが、ルターにとって、「神の義」というのは、自分を裁く、神の厳しい態度、自分は、とても神に満足していただけるような人間ではないと、いつも罪の意識におびえていました。しかし、「あなたの義」というのは、神がわれわれを罰する義ではなく、わたしたちを義とする義であり、わたしたちを、赦しあがなう神の恵みであり、「あなたの義」は、イエス・キリストのことであるという意味だと悟りに達したそうです。そこで、一点突破の道が開けたのでした。

ちなみに、旧約聖書の原文は、「ツェデク、ツェダカー」という言葉で、これは、神があがなう、赦すという意味が強い言葉で、「神が人間を、その行いに応じて、厳しく裁き、罰する」という意味よりも、「神はわたしたちをあがない、救う」という意味であるそうです。
ルターのこの解釈は、彼を新しい道に導いた。

カトリック教会とルーテル教会の対話が進行し、基本的に「義認」の理解について、強調点の違いはあるが、基本的に一致しているという結論に至り、共同宣言が出されています。

さて、わたしたちは、いま、日本のこの地で、イエス・キリストを宣べ伝える、そのようなときに、どのような言葉で、どのように伝えたら良いのでしょうか。

悩み、苦しみ、生きがいを失っているひとびとに、安らぎ、救いを伝えるために、どのようにしたら良いかということを、これからもご一緒に求めていきたいと考えます。

新しい年を迎え、決意を新たにして、苦しみ悩み、人生の意味に戸惑う一人ひとりを、神がどのように包んでくださるのかということを、わたしたちは自分の言葉と生活を通して、伝えて行かなければならないのではないかと思います。

2017年　待降節
さいたま教区管理者

大司教　ペトロ　岡田武夫